断章
旭川のアイヌ語地名研究
118
高橋 基

―伊野川から忠別川までの地名⑦―

今回は**掲載地図**(現行五万地形図を八七%縮小)のエタンペッ(現・公式河川名「江丹別川」)について述べる。

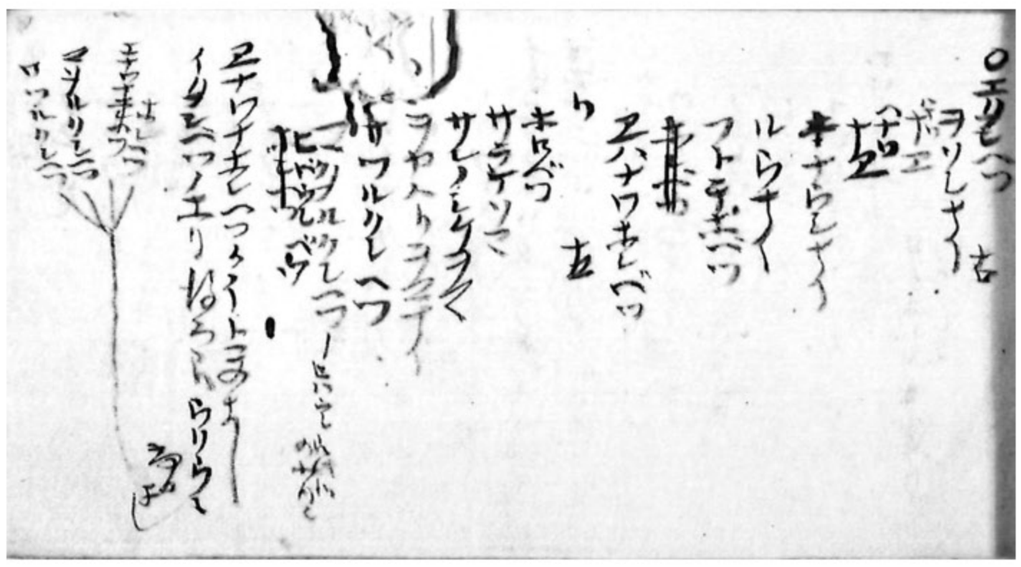
江丹別川の地図上の初出は、文化四年(一八〇七年)の近藤重蔵の『蝦夷図』(高木崇世芝氏旧蔵)の「フタンベツ」である。続いて、文化十四年(一八一七年)の伝・間宮林蔵『(仮称)蝦夷図』(国立文書館所蔵)の「イタンベツ」であるが、共に語意は不明である。

写真は、安政四年(一八五七年)に、松浦武四郎が調査した時の野帳(フィールドノート)『巳第二番』に書かれた江丹別川の十五の支流名と源流図である。松浦武四郎の報文日誌の「再篙石狩日誌」では、江丹別川について次のように記述している。

左の方川有。巾凡七八間、両岸平地にて地味よろし。昔は此川口にも夷家弐三軒有し由、今はなし。魚類鮭・鱒・鯇・桃花魚多しと。

上川に入って、初めて江丹別川川口に、往時は三軒のコタンがあったと記録する。しかし、松浦が調査した安政四年には、その家が一軒もないと明記。この家屋がなくなったのは、石狩浜の場所請負制度の悪政のためと、言外に非難をしているのである。松浦武四郎の上川調査は、人別帳(当時の戸籍簿)の調査も、大きな目的でもあったのである。

松浦は、その上で、野帳から江丹別川の十一の支流名を記録し、この川の最上流から雨竜川筋へ山越え出来ることを明らかにしている。しかもそれは、夏道と冬道があることを記録している。この雨竜川筋への山越えの道については、次回に詳述する。


野帳『巳第二番』

松浦武四郎は、江丹別川の川名の由来については、全く触れていない。明治二十三年に調査した永田方正は、江丹別川の地名解を次のように書いた。

エタンペッ(etamp-pet 漂川)―アイヌ舟を覆し漂ひたる川。

これは、アイヌ語のエタンポ(etampo 溺れる)に関連した伝承を永田が記録したものと思われる。また、永田も十三の支流名を書いていて、その中に、夏路と冬路があることも記録している。

昭和三十五年に、知里真志保は、江丹別川の地名解は「よくわからない」とした上で、次のように、仮説を提示した。

エタンペッ(etampet)―語原はよく分からない。或いは「エ・タンネ・ペッ(e-tanne-pet 頭・長い・川)の義でもあろうか。

知里のいうエ(e頭)は、川の水源を意味し、水源までの距離が、長い川を意味するものである。

昭和五十九年に、山田秀三は、『北海道の地名』の中で、右の永田地名解と知里地名解を紹介した上で、知里の「エ・タンネ・ペッ(e-tanne-pet 頭・長い・川)」とした意見を採りたいと表明している。

また、山田秀三は、懇意にしていた近文の荒井源次郎翁の意見も次のように紹介した。

古い人は、エタンベツは和人が縮めた名だ。ほんとはエトコタンネベツと呼ぶのだといっていましたよ。

山田秀三は、荒井源次郎翁の話を受けて、次のようにまとめている。

この川に入ると、確かにエトコ(etok 水源)がタンネ(tanne 長い)な川である。近文のアイヌは、雨竜川筋を熊狩りのイウォロ(iwor 狩り場)のようにしていて、この江丹別の川筋を通って、雨竜と往復していたという。

次回は、この雨竜川筋への「交通路としての江丹別川」について記述する。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します